

「つくし」ってのは一間ぐらいの樽を、糸と針をつけて餌をつけつけて取るんだが、私が針に餌をつけて、おやじさんが樽を二間ぐらいに立て立てして、船で行くんだ。だがそれも始めの頃は餌つけも出来なくて、おやじさんにおこられおこられたもんだ。あの頃（明治末期から大正時代）は、うなぎもずいぶんとれて、三百ぐらい「つくし樽」を立てて、三貫目以上も取った事があつたよ。だけれども漁は当りはずれがあつて、全然とれないこともよくあつた。

えびだるは一番力を入れてやつたね。これはずいぶん遠くまで行つたもんだ。高浜入りから、江戸崎、よご入りの方まで樽を置きに行つた。朝三時に起きて、船にえびだるを何百もつんで、おやじさんが樽をこぐ、私が樽を引く、そうやって、何里も湖を渡つて行つたんだよ。風がある時には木綿の帆をかけたたりしてね。ここから高浜だの、よご入りまでは速いだらう？ だから大変だつたよ。よごの方まで行かなくて、この辺でも取れるんだけど、あつちへ行くところの辺の倍はとれる。だからわざわざ行つたんだよ。ところで風のある日なんか波が立つ、そうすると樽を引く手が赤むけになって、腰の下には座布団をひいているんだけど、波が高くなると、

どんどんとぶつかつて、尻の皮が赤べえになつちまうよ。

それも毎日だよ。朝の三時に行つて、七時か八時にたるを仕掛けて、昼の十一時、十二時に戻ってくる。そしてめしを食べたらすぐ百姓をやる。食べ物は、ごはんは梅干し、魚の煮入れだけだつたよ。

春は苗代作り、夏は草取り、秋は稲かり。そしてその米の半分は地主に持つてかれちやつたんだから、片方では漁をやり、片方では百姓やって、毎日苦労したもんだ。腹が大きい時も何もなかつた。私は五人も子供を生んだけど、二番目の子供を生んだ時には、今日は何だかお腹がしくしくして、

「今日は、漁には行がねえかなあ。」

「なんて言つたら、おやじさんはめずらしく、」

「そんなら行くな、代りに隣の虎さん頼んでくつから。」なんて言つて、おやじさんが虎さんを頼みに行つている間に産んちゃつたんだ。ハッハッハッハッ。だから産み月になつたつて、漁もやれば、百姓もやつてたんですと。産んでからは、二十一日間漁を休んだ。なぜかってえとうちのうちのおやじさんは、欲が深かつたんだけど、よく「医者

者の稼ぎしねえでもらうべ！」なんて云い云いしてね、二十一日休まずに漁に出て、病気になるたら医者代心配だつていうんだよ。だからお産の時を除けば、いつだつて何でもやつた。ここらは二年にいっぺん、三年にいっ